

# 音楽科鑑賞授業において生徒間コミュニケーション を成立させる教師の役割 ーグループ活動に着目してー

学籍番号 229333

氏名 乾あすか

主指導教員 藤本佳子

副指導教員 兼平佳枝

## 1. 研究の背景

筆者が実習を行っている中学校では、教科を問わず、生徒同士の話し合いが多く取り入れられており、実習校の教育目標にある協同意識を高めるために、グループで、自分の意見を交流したり、グループで一つの意見にまとめたりするといった、コミュニケーション能力を育成するような活動が多く見られる。一方で、筆者が実際に見た音楽の授業内のグループ活動では、全ての生徒が自信を持って意見を交流できているわけではなく、自分の意見を持っていない生徒や、他者からの視線を気にして、自ら情報発信する機会が少ない生徒も見られた。しかし、音楽科は、授業の中で音楽の演奏や作品、批評文を作り上げていく学習活動の過程で言語・音・身体による様々なコミュニケーションが行われる可能性をもつ教科である。したがって他者とコミュニケーションを図って互いに協力する力を育むことができる教科だといえる。よって、どの生徒もコミュニケーションに参加できるような音楽科授業を、どのように行っていくかに関心を持った。

## 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、音楽科鑑賞授業において、グループ活動における生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の役割について明らかにすることである。

研究の方法として、まず、コミュニケーションの用語の規定を行い、先行研究からコミュニケーションの成立について規定する。基本学校実習Ⅱ(1年目後期)では、生徒のグループ内コミュニケーションが成立するような雅楽《越天楽》を教材とした「図形楽譜づくり」の授業を行う。音楽科授業においてグループ活動で生徒間コミュニケーションが成立する様相を見るために、研究授業実施後、グループ内の生徒が共通の目的の実現に向けて、音楽から知覚したことや感受したことをどのように言語や非言語で他者と共有しているのかという視点で授業分析を行い、自身の実践を振り返り、成果と課題を見出す。見出した課題についてはその解決方法を検討する。発展課題実習Ⅰ(2年目前期)では検討した方法を組み入れて〈ファランドール〉を教材とした図形楽譜づくりの研究授業を行う。研究授業実施後は、生徒のコミュニケーションはいかなる様相を見せるかという視点で授業分析

を行って自身の実践を振り返り、グループ活動における生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の役割について考察する。

### 3. 研究授業の概要

#### 3.1 基本学校実習Ⅱ(1年目後期)

《越天楽》の実践では、教師の介入によって知覚・感受の発言が詳細になる場面が見られた。しかし、その発言内容を見てみると知覚・感受がコミュニケーションを通して深まっていったといえるような場面はあまりみられないという結果になった。このことから、生徒同士のコミュニケーションの内容に知覚・感受の発言が少ないという問題が発見された。

#### 3.2 発展課題実習Ⅰ(2年目前期)

《越天楽》実践の結果を受けて〈ファランドール〉の実践では、教師がいかにグループに介入するかを主な課題点とした。実践では、教師と生徒が1対1で話すのではなく、グループの他の生徒にも意見を求めることで、生徒同士のつながりができ、形式的側面について知覚したことや内容的側面について感受したことを含めたコミュニケーションがグループ内に広がるといった様子が見られた。

### 4. 結論と考察

研究の結果、コミュニケーションの様相から、教師の役割は、4点あることがわかった。教師の役割は、①音楽から知覚・感受したことの根拠についての問いかけ、②音楽の注目箇所についての問いかけ、③実際の音で確認する場を設ける、④知覚・感受したことを言語以外の媒体で表すよう促すことである。これらのことから、教師はグループ活動において、生徒が何を考えるのか目的を明確にさせ、班員全員で考えられるように働きかけることで、コミュニケーションを成立させることができるのではないかと考えた。

### 5. 今後の課題

今回の研究では、図形楽譜を用いた音楽科鑑賞授業で、グループ内のコミュニケーションを成立させる教師の役割について研究結果を出した。その結果を生かして、授業者として授業をする際や机間指導を行う際に、知覚・感受を引き出す問いかけや実際の音で確認する場を設けることを心がけたい。今後は今回の研究で得た知見を踏まえながら、図形楽譜以外の音楽科鑑賞授業における生徒間コミュニケーションがどのように発展し、教師がどのように関わっていくのかを明らかにしたい。